

自閉症と他者

酒木 保

所属 宇部フロンティア大学人間社会学部

自閉症児の常同運動やエコラリアなどの癒着的同一化が意味のない反射的行動とみなすことは間違いである。彼らは事実、そこで行われているとおりの状態にあるのだと考えなければならない。このように理解すれば彼らの現象する身体、生きている世界をもった身体の在り処が明らかになってくる。

これには幾分の説明を要する。身体は主体を収納し、主体を位置付けることを担うのである。我々がここにおいて今後問題とするのは、このようなく身体>が主体にとって保証されない状態である。

すなわち、身体的な現われを通じて自己をあらわすことができない場合、現象の中で現象を展開してゆくことができる立場を喪失している場合、世界のもとにとどまれない場合などであり、いずれも自閉という状態であることが予見できるであろう。そして、これらは、本来、<身体>に宿るべき主体が、<身体>からの逃亡を企てたことによるものと我々は考える。自閉症児の治療に関わって体験する、人称の回避と密接につながるように思われる。

とりあえずは、私は彼ではない、あなたにどうすれば会うことができるのか、そして、私はあなたにどこで会うことができるのか、という素朴な疑問から出発しよう。重度の自閉症児の場合は、自己の生存が、そこにおいて不都合になると、癒着的同一化を生存のための機能としてその何か（自己の原点ともいうべき）がしばしば用いているように見うけられる。特に、自己の身体のイメージがいまだ未成立の場合は、ものへの癒着的同一化は容易であるし、それゆえに、重度の自閉症であるとの見解に立ち、この見解においては治療も困難を極めることになる。

患者にとって、生きていくのに不都合な状態があり、その状態から脱したいという、患者自身の治療への意欲によって促進されるものである。しかし、いまだ自己の身体のイメージが未完成である重度の自閉症児は、自身の形態と同じであることにこだわりを持つ必要がなく、容易にいかなるものとの癒着的同一化がなされ、極簡単にその場の不都合な状態を切り抜けていくことができる。したがって自閉症児の防衛機能としてのそれは対象との癒着的同一化と呼ぶにふさわしい。この機能を用いるがゆえに、彼らの行動は統一を欠きとりとめのない無意味なものと見なされる。自閉症児は、自分が人であることの意識をぬきにするなら、人であることの必要の全くないところの適応性を持つところの存在であると考えられよう。

すなわち、私自身が何ものであるべき必要のない存在であっては、自身がいかなるものと癒着しようと、その癒着したことについて何の困難も不都合も生じないということである。重度の自閉症の場合は、この癒着の不都合さを喚起することから始め

ねばならない。本発表では、この認識をベースにした治療により、大きく症状の改善した一症例を提示する。